

# FRJ News Letter

Vol.2. Aug 2016

発行責任者 代表理事 小山英之 / 編集 事務局 檜山怜美

## Contents

### 特集：

問われる国際社会の結末  
—憎悪の連鎖を越えて

### 最近の活動

ニュース Pick Up

シェルター通信 ほか



いくつもの国境を越え、欧州内を線路に沿って移動する難民

## 問われる国際社会の結末 —憎悪の連鎖を越えて

浜辺に打ち上げられたシリア難民の男の子。その小さな亡骸は各国メディアに掲載され、世界中に衝撃を与えました。日本でも、多くの人がその姿に胸を痛め、世界で起きている悲劇に関心を寄せるきっかけとなりました。シリアやアフリカ諸国からヨーロッパを目指す人々の動きは連日のように報道され、「難民危機」という言葉をもって表現されました。同時に、日本の難民受け入れの現状にも光が当てられ、対岸の火事として傍観するのではなく、国際社会の一員としての責任と義務をいかにして果たしていくのかという観点からも「難民問題」が語られるようになりました。

あれから、早1年が経とうとしています。その間、難民を巡る状況は刻一刻と変化してきました。今では、頻発するテロや暴力によって、難民受け入れへの漠然とした不安や恐怖が煽られ、それは時に社会の中で新たな憎悪を生んでいます。その一方で、紛争や迫害によって家を追われる人々の数は、日々増え続けています。UNHCRが毎年発表しているグローバル・トレンド（年間統計報告書）によれば、2015年末時点で6530万人が移動を強いられています。これは過去最多であり、世界で113人に1人が庇護申請者、難民、国内避難民のいずれかに当たるということを意味します。



上陸準備に入る難民を乗せたボート。歓喜の表情を見せる人、子どもを抱え不安な表情をみせる父親。国際移住機関 (IOM) によれば、2015年に海上で死亡した難民らの人数は世界全体で推定で5350人に上る。



ギリシャ・サモス島の一時滞在施設で遊ぶ難民の子ども。衛生状態が悪く、特別なケアを必要とする人々への支援がほとんどない施設もある。



破壊しつくされたシリアの古都ホムス。

## 2015年ー難民を巡る世界の動き

6530万人のうち、先進諸国で庇護申請を行った人が320万人、難民が2130万人、国内避難民が4080万人です。欧州を目指す危険な航海ばかりがクローズアップされてきましたが、欧州に渡れるのはごく一部の人に過ぎません。大多数の人々は欧州以外の国々、紛争などが起こっている自国内あるいはその周辺国に避難しているのが現実です。現在、最も難民を受け入れているのはシリアと国境を接するトルコで、その数は250万人に上ります。また、同じくシリアと国境を接するレバノンでは、1000人中183人が難民であるとされ、総人口に対する難民の割合が最も高くなっています。また、先進諸国で庇護申請が最も多かったのはドイツで、2015年の1年間で44万人を数えました。こうした状況を受け、難民流出を防ぐ取り組みと同時に、今現在避難を余儀なくされている人々について、どこまで国際社会が協働して対応できるのかが問われています。各国には、資金協力に留まらず、難民の自国への受け入れを通じた貢献や、各国内での難民保護への正しい理解の促進も求められています。しかしながら、受け入れに慎重な国も少なくありません。



© UNHCR / Matthew Saltmarsh  
レバノン東部・ベカーの一時避難施設で暮らすシリア難民の子ども。



© UNHCR / Daniel Morgan  
ドイツ・ベルリン。美術館でガイドとして働くシリア難民の女性。

## 日本の難民受け入れ状況

日本に目を転じると、2015年度に難民認定制度を通して難民申請を行った人の数は7586人、難民として認められたのはわずか27人、また難民とは認定されなかったものの、人道的な配慮が必要なものとして在留を認められた人は79人でした。加えて、同年に第三国定住制度によって、マレーシアから日本へ受け入れられたミャンマー難民の数は6家族19名でした。また、日本社会の中では「難民問題」への関心こそ高まってきているものの、どこか遠い国で起きている事とされることもまだ少なくありません。

## 世界難民の日ー世界の問題を私たち一人ひとりの問題として

そうして迎えた2016年6月20日、世界難民の日。FRJでは、広く多くの方に難民をより身近に捉えていただく機会をもちたいと、6月22日に「なんみんフォーラムオープンデー2016」を開催しました。FRJ加盟団体がそれぞれの活動を紹介するブースを設置し、参加者が各々の関心から、日々難民支援に携わる各団体スタッフと対話できる場を作りました。また、難民の方による手作りのお料理を提供したほか、日本の難民受け入れの変遷をたどるスライドも放映しました。会場には、日本に暮らす難民の方も駆けつけて下さり、日頃直接会うことの少ない当事者とお話しすることが出来るまたとない機会に、多くの方が日本語と英語を交えながらの会話を楽しみました。

当日は予想を上回る、100名もの方にご来場いただき、大盛況のうちに幕を閉じました。皆さまと近い距離で現場の声や取り組みをお話しすることを通して、FRJ一同、難民問題に対する関心の高さを、驚きと喜びを持って実感しました。参加者の方からは、「難民問題に関心はありつつも、その現場を知る機会はなかなかなかったけれど、今回その一端を垣間見ることができた」、「他人事ではなく自分の社会の問題なのだということ、難民支援に携わるスタッフの方とお話しすることで感じた」という感想を頂戴しました。

今回の企画は、難民について、参加者の方の理解を深めていただくことが出来たと同時に、関心を持つ方々同士の繋がりにもなりました。国際社会の一員である以上、今後ますます、難民の受け入れを巡って、日本社会全体でどこまで具体的な議論ができるかが問われていきます。FRJでは、今後ともより一層、難民支援の輪を広げ、深めていけるよう努めて参ります。



当日のお料理。ミャンマー料理は、高田馬場のミャンマー難民家族が営むレストラン「スイウ・ミャンマー」から。中東料理は、FRJのシェルターに住む難民申請者の方が作っていただきました。



会場は、日本福音ルーテル社団のJELAホール。NGOや支援団体、大学、企業、地域など様々な形で難民支援に携わる人や、難民当事者、そして難民に関心を持つ人たちが一同に会しました。



# 最近の活動

## 難民申請者の困窮防止に向けた取り組み

難民認定申請の結果を待つ間、就労許可がないために働くことが出来ない、あるいは、健康上の問題など様々な理由から十分な収入を得ることが出来ず、生活が困窮状態に陥る難民申請者は少なくありません。難民申請者の生活を支援する公的な生活保障の枠組みとして、アジア福祉教育財団難民事業本部（RHQ）による保護費があります。RHQは政府の委託により、日本に暮らす難民申請者のうち、生活困窮者と認められる人に対して、保護費を支給しています。しかし、受給の条件が厳しいため、本来支援を必要とする難民申請者全てが保護費を受給できるわけではありません。また、保護費の申請から支給開始まで平均2ヶ月程度かかり、FRJの支援団体間で把握している限りでは、中には6ヶ月近くかかることもあります。加えて、保護費は、生活費、医療費、住居費を支援しますが、最低限の生活保障としては必ずしも十分には機能しておらず、特に脆弱性の高い難民申請者の場合は、その生活に深刻な影響が及びます。そのような状況を鑑み、FRJは2009年より外務省・RHQとの保護費に関する意見交換会を定期的に開催してきました。2015年12月に開催された意見交換会には計23名が参加し、保護費の支給状況やその制度上の問題点などについて話し合いました。今年5月には、FRJは保護費に関するワーキンググループをFRJ内に設置。支援団体間でより具体的に現状を整理・共有し、難民申請者の困窮防止に最大限取り組めるよう体制強化を進めています。

## 第2回全国難民支援者交流会議の開催

困難を抱えている難民や難民申請者を支援するにあたり、支援者側が疲弊し、孤立しないよう、支援者同士を繋ぎ、そのネットワークを強化していくことは、FRJの重要な役目です。そこで、全国各地で難民支援に携わる方たちの交流と情報交換の機会として、2015年度より全国難民支援者交流会議を開催しています。10月の第1回目につき、2016年2月に第2回目の会議を2日間にわたり開催しました。全国各地から、約35名の支援者、実務家、研究者などが集い、医療支援、脆弱者の保護、通訳について、現状と課題を共有し、様々な観点からの提案がなされました。全国難民支援団体交流会議は2016年度も開催を予定しており、前年度の成果を生かし、次のステップに向け取り組んでいきます。



\*本事業は、独立行政法人福祉医療機構（WAM）助成事業として、認定NPO法人難民支援協会からの委託を受け実施しています。

## アメリカ視察への参加

2015年4月初頭の約1週間、FRJ事務局は米国での難民受け入れに関する現地視察に参加してきました。この視察は、日米韓による難民の社会統合に関する優れた取り組みを共有するプロジェクトの一環として、認定NPO法人難民支援協会（JAR）が主催したもので、国際交流基金日米センターの助成を受けています。視察には、JAR・FRJなど日本のNGOから3名、韓国のNGOから4名が参加し、米国カリフォルニア州サンディエゴ、テキサス州フェニックスの2都市を訪問し、米国に受け入れられた難民の支援を行う団体の現場視察や意見交換会などを実施。三カ国間のパートナーシップを強化しました。



サンディエゴでの公開シンポジウムの様子。日米韓での取り組みを共有し、議論を深めました。



政府予算だけでなく、自己資金や現物による補完も行いながら、定住プログラムの開発が盛んな米国NGO。写真はサンディエゴのコミュニティガーデンの様子。難民が自由に植物を育てることができます。

# その他の活動報告

- 2016年1月 2015年度第3回法務省入国管理局・日本弁護士連合会との三者協議会開催\*
- 2016年2月 精神科医 野田文隆医師による講演会「難民と精神障害」開催
- 2016年3月 難民によるトークイベント「なんみんカフェVol.3～シリア編～」開催
- 2016年4月 運営委員会開催
- 2016年6月 2016年度第1回法務省入国管理局・日本弁護士連合会との三者協議会開催\*  
運営委員会・総会開催



なんみんカフェVol.3の様子

鶴見大学・国連難民高等弁務官（UNHCR）駐日事務所との連携による難民申請者のための無料歯科治療も継続しています。

\*2012年2月、法務省入国管理局、日本弁護士連合会、なんみんフォーラムは、難民認定手続等に関する市民団体との協力関係に係る覚書を締結しました。覚書に基づき、それ以降、「難民問題に関する三者協議会」を定期的に開催しています。更に、三者協働での空港での庇護希望者への対応を進めており、FRJは、加盟団体と連携し、庇護希望者への住居・ケースワークを提供しています。

最近の日本の難民に関する政策の動き、メディア掲載情報をお伝えします。

## 【各種発表】

- 2015年難民認定数等発表（3/26 法務省発表）
- 第三国定住難民第6陣 定住支援プログラム修了（2016年3月11日 難民事業本部発表）
- 第三国定住難民第6陣 地域コミュニティでの定住開始（2016年3月18日～ 難民事業本部発表）
- シリア人留学生受け入れ発表（5年間150人）（2016年5月20日 「持続可能な開発目標(SDGs)」 会合において安倍首相発言）

## 【メディア掲載】

- 「難民の心の問題にどう取り組むべきか 多文化外来の精神科医が講演」（3/1 クリスマントゥeday）
- 「『世界難民の日』に合わせ 支援団体が集まり『なんみんフォーラム』開催 難民・支援者の交流の場に」（6/29 クリスマントゥeday）

## シェルター通信

FRJは、カトリック東京大司教区の難民用緊急シェルター「ひかりハウス」の運営を行っています。シェルターには、共用のリビングやキッチン、シャワールームとトイレ、そして難民それぞれの個室が完備されています。2016年を迎えてからは、2名が自立へ向けて、一人暮らしに必要な物品の確保に奔走しながらも、何とか無事にシェルターを卒業していきました。

居住される難民の方の多くは、空港から着の身着のまま到着することも少なくないため、生活必需品はシェルター内にもストックしています。セカンドハーベスト・ジャパンより月1回の食糧支援をいただき、その他、多くの方からの日用品のご寄付、そして皆さまからのご支援に支えられながら、シェルターの運営を行っています。また、2016年6月には、LUSHジャパンより、バス用品等のご寄贈をいただきました。LUSHジャパンからは、「収容代替措置促進プロジェクト」への助成として、シェルターの水道光熱費の一部もご支援いただいています。

居住者のほとんどにとって、「ひかりハウス」が日本での初めての住まいです。戸惑いや不安を多く抱えた時期に、シェルターが彼らの「帰る場所」となります。一人でも多くの難民申請者が安心して日本での生活をスタートさせ、適切なサービスにつながり、そして自立に移っていただけるよう、今後ともFRJはシェルターの運営に取り組んで参ります。皆さまのご理解とご支援を、どうぞよろしくお願い申し上げます。



シェルターで共同生活を送る難民申請者。

## 難民へのご支援 をお願いします

郵便振込にて受け付けております。

口座記号番号：00180-0-652128

特定非営利活動法人なんみんフォーラム

### 2万円あれば

空港で庇護を求めた難民1名へ  
1ヶ月間の生活支援ができます。



### 4万円あれば

難民のための緊急シェルターの  
1ヶ月間の水道高熱費を支えられます。

